

介護等体験からの「学び」

荻野 佳代子

はじめに

介護等体験は、1997年成立1998年施行「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に関わる教育職員免許法の特例等に関する法律（介護等体験特例法）」に基づき、1998年度入学者より実施されている。2015年度までに17年が経過し、導入当初の混乱を乗り越え定着をしてきているように思われる。

入江（2008）は導入当初の混乱について、議員立法によるいわばトップダウン的な導入であったために現場の構想と異なるものに対応することで手一杯だったこと、とりわけ大学にとって問題となったこととして①「体験」のとらえ方のずれ、②大学に期待される事前指導の2点を挙げている。すなわち、介護に関する専門的な学習を前提とした「実習」ではないことに施設が戸惑いや不満を感じながら受け入れていることを大学は受け止め、事前指導の工夫や徹底により善処すべく努力してきたのである。

介護等体験で何を学ぶか、介護等体験特例法ではその目的として「義務教育に従事する教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性にかんがみ、教員としての資質の向上を図り、義務教育の一層の充実を期する観点から」介護等体験を行わせると定められている。さらに法律の成立過程において、法案の提案理由として「いじめの問題など困難な問題を抱える教育の現場で、これから活躍される方々が、高齢者や障がい者に対する介護等

の体験を自らの原体験として持ち、またそうした体験を教育の現場に活かしていくことによって、人のこころの痛みがわかる人づくり、各人の価値観の相違を認められる心をもった人づくりの実現に資することを期待」するものと述べられている。

こうした趣旨を踏まえて、例えば教科書としても使用されている現代教師養成研究会（2009）では、介護等体験が、教師に必要な力量・資質として中心的な要素である「子どもへの関心と愛情（子ども観）」と「子どもの発見・理解とコミュニケーション能力（教育観）」に直接かわるものであると指摘している。具体的には、「生命の尊さ」を感じ「子どもたちに対する鋭い人権感覚」を育み、「人と人との共通基盤に気づく」ことにより「共感的・受容的人間関係」を学ぶことなどである。そしてこれらが教師として子どもと教え・学ぶ関係をつくる基盤となる、人間関係を構築する力につながるとしている。

このような学びに向け、事前・事後学習のあり方や内容については多くの大学が試行錯誤のもと充実を図っている。例えば柏崎（2014）は、体験には主体的な学びが求められるため、体験に際して最低限必要な知識を身に付け、戸惑いや不安を軽減して臨むことが必要であるとし、事前学習の重要性を指摘している。そして事前学習の効果測定を行った結果「介護等体験への不安」が軽減し、「体験先への理解や介護等体験全般に関する理解・心構え」の自己評価が高

くなっていることを示している。一方入江(2008)は、体験後に体験について語るなど学生が自分の体験を振り返り意味づけることによって学びを作り出すことの意義、すなわち事後学習の重要性を指摘している。こうした背景をもとに、事前事後学習および体験を含めたかたちで単位化もしくは前提科目の履修を義務付けている大学も少なくない。

本学では、2005年度より事前・事後学習を半期1単位の授業として行っている。授業の履修が体験の条件となっており、基本的に社会福祉施設での体験を行う時期に重ねて履修することになっている。授業では、体験の心構えについてのディスカッションや施設・学校の教職員の方からの講義、および体験終了者が体験を振り返り、互いに体験を語り聴きあう時間などを設けている。授業のかたちをとって今年で10年が経過するが、学生たちは授業での事前・事後学習も含めて介護等体験から何を学ぶか、改めて整理することにより、今後のより良い事前事後学習のあり方を検討することとした。

振り返りレポートの整理

学生たちの学びを確認するために、事後の振り返りとして授業最終回に課している振り返りレポート(A4用紙1枚程度)の記述を整理した。対象となったのは、2013年度～2015年度履修者のうち144名分のレポートである。レポートに述べられた記述から、「学び」ととらえられているものを抜粋し、意味内容が似ているものをグループにまとめて整理した(表1)。なお、本学では、社会福祉施設5日間と特別支援学校2日間の体験を行う者と、社会福祉施設7日間の体験を行う者がいる。授業は社会福祉施設での体験時期に合わせて履修するが、一部には日程上授業終了時にまだ体験をしておらず、授業内容をもとにした振り返りレポートである者も含まれる。また特別支援学校については体験しない者、予定はあるが授業履修時にはまだ体験していない者がおりその時点で体験をしている

学生は一部に限られている。

1. 高齢者・障がい者と接する体験からの学び

まず、学生達は日々の生活のなかで障がい者、高齢者とほとんど接する機会がないことが多い。施設で接する高齢者は学生の祖父母より年齢が上の年代であることも多く、認知症である人も多い。こうした人々と接する機会そのものが学生にとって新たな出会いの場であり、多様な人々、個性、価値観があることの気づきの機会となっている。

また、学生たちは施設や学校で出会う高齢者・子どもたちが、彼らが思っていたより明るく元気であること、ハンディを感じさせないほど力強く活動している姿に心を動かされて帰ってくる。高齢者との会話から、例えば戦争体験の話が特に社会科教員を目指す学生の学びとなるように、人生の先輩としての言葉に敬意を抱く契機にもなっている。

高齢者・障がい者と接する機会を持つことにより彼らを身近に感じ、社会でともに生きる存在であることを認識する。そして「体験後もボランティアなどで関わりたい」、「街で困っている人を見かけたら手助けしたい」など意識の変化がみられるのである。

2. 人との接し方についての学び

学生たちの学びとして多くの記述がみられたのは人との接し方、コミュニケーションについてである。日常生活にはないコミュニケーションの難しさに直面することにより、自らのコミュニケーションの取り方を見直し、またうまくコミュニケーションが取れたときには達成感や自信へとつながっている。

体験当初は緊張で表情も硬くうまくコミュニケーションが取れない。そこから自分なりに工夫して、もしくは教職員に指摘されて積極的に

自分から関わろうとする姿勢に転化させていく。

そしてより良いコミュニケーションをとるには、相手の立場に立って相手を理解しようとする受容的態度、相手の話をよく聴こうとする傾聴の姿勢すなわちカウンセリングの基本姿勢が重要であることを体験的に理解するようである。

例えば普段意識せずに使っていた言葉が通じない場面に遭遇し、相手に適した言葉や表現をするべく工夫を重ねる、時には同じ話を繰り返す高齢者の方からの話にじっくり耳を傾け、気持ちを含めた反応を返す、聴覚障がいを持つ児童にジェスチャーを交えながら伝えようと努力をする、などである。相手を理解しようとする努力は、相手の表情などノンバーバルな表現を含めて相手をよく観察する態度を身に着けることにもつながっているのである。

3. スタッフ・教員からの学び

学生たちは、そこで働く教職員の動きや利用者・生徒への関わり方を観察し多くを学んでいることがわかる。まず、介護・教育現場で働くことの忙しさ、大変さに気がつく。利用者・生徒の安全や健康に最新の注意を払いながら活動が進められていること、またそれでもハプニングが起きることもあり臨機応変に対応する力も求められる、対人援助職の責任の重さを理解する。

学生たちの記述によく見られるのは、「何でもやってあげるのではなく、できないところ、必要なところを援助することが支援（教育）なのだ」という気づきである。そのために個人に対するきめ細やかな観察・理解が基盤になっていることやその情報を教職員間（組織）で共有することの重要性も感じている。そしてこのことは教師になった後に、子どもの発達や自立を援助する、すなわち教育に関わる姿勢に活かせるものとして認識されている。

また、これも学生から多く記述されているのが、施設・学校の雰囲気明るく楽しいものであることである。それは先述のとおり高齢者・子どもたちがもつ明るさ、前向きさだけでなく、教職員が明るく楽しい雰囲気を作っていることへの気づきである。教職員は常に笑顔で接しながら、利用者・子どもたちが活動に前向きになるように促し、また個人だけでなくグループ全体に目配せをして全体の雰囲気づくりに努力をしている。そんな姿から、教師としてクラスづくりに活かすべき点であることを学んでいるのである。

4. 人間としての成長

教師になるために「介護」の経験がなぜ必要か、当初は懐疑的な気持ちで体験に臨む学生も少なくないが、ほとんどの学生が体験後には意義あるものと捉え直している。特に施設や学校およびそこで活動する高齢者・子どもたちに触れることによりイメージが変化し、先入観にとらわれていた自分に気づき、視野が広がる体験と感じられる。また、施設で高齢者に感謝されることにより、自尊感情が高まりまた感謝することの大切さにも気づく。これまでの記述にあるような学びの多くは、「教師としてというより人として体験するべき」と学生には感じられているのである。

5. 教師としての資質向上

体験が教師としての資質向上にどのように関わっていると学生がとらえているのだろうか、まずイメージをしやすいのは特別支援学校での体験であろう。教師になることは、特別支援学級を担当することがありうることを含めて、広い意味で特別支援教育を担うという意識、心構えにつながっている。実際にこの体験が契機となり特別支援教育に関心を持ち、自分の進路とする者も少なからずいる。

また福祉については、体験で得た福祉に関する知識や理解が教師としても活かせるものとして認識されている。地域の施設を知り、地域に住む人としての高齢者を理解することは、将来関わるであろう生徒がおかれた地域や家族の生活を理解することになるという気づきである。

そして、体験で出会った高齢者・子どもたちの姿や事前に持っていた自分の先入観への気づきから、教師にふさわしい人権尊重の精神、道徳観を身に着け、偏見、差別のない社会づくりを生徒に伝える意識が芽生えている。このことはまさに介護等体験の趣旨として法律にうたわれている「個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識」の深まりといえる。

先行研究を踏まえた考察

以上、学生たちの記述から彼らがどのような学びを得ているかを整理した。

入江 (2008) は、学生たちの多くが体験を意味あるものと振り返っており、具体的には以下の3点を挙げている。第一には障がい者や高齢者に対する気持ちやイメージの変化、第二に「コミュニケーションの大切さ」への気づき、第三に感謝される喜びと自分の有用感である。学生たちは同年代の均質な人間関係のなかで生活しているために、想像力やコミュニケーション力が不足しており、そうした彼らにとって介護等体験の意義が大きいことを指摘している。

本論でも3点の内容は同様にみられており、特に「コミュニケーションの大切さ」については堀 (2012) など他でも多く指摘されている。特に本学は、デイ・サービス施設における比較的要介護度の低い高齢者との、交流を中心とした体験であることも関連しているであろう。さらに本学ではカウンセリングの基礎を扱う教育相談関連の科目と介護等体験を同じ年度に履修する学生が多いため、傾聴や受容・共感的態度など授業で学んだ内容が体験と結びつきやすいことも推測される。堀 (2012) は「体験活動」としての介護等体験の意義を指摘しているが、

アクティブラーニングの重要性が高まる昨今、介護等体験を主体的な活動の場としてとらえ事前学習の内容をさらに精選していくことも必要であろう。学生からも座学でなく、体験することの大切さや自尊感情の高まりについての記述が得られている。

こうした学びは入江 (2008) から基本的に変化しておらず学びの質は年数が経ても変わらぬものと言える。本論ではさらに新たなカテゴリーも抽出されているが、これらが最近の状況の反映なのか判断は難しい。しかし11年間の縦断研究を行った田実 (2015) や3年間の変化を検討した伊藤 (2010) も、学生の意欲や学びの程度は経年変化していないことを示しており、教職に対する社会の意識が変化するなかで、その意義は広がりこそすれ少なくとも変わってはいないと考えられる。

ところで、社会福祉施設と特別支援学校という体験先の違いについては、本論では視点に含めていないが、伊藤 (2010) は質問紙調査の結果、「人間の尊厳についての理解」、「社会連帯の理念についての理解」、「コミュニケーション能力の高まり」などの点では社会福祉施設が、「実際に教師になったときに役立つ」、「全体として有意義だった」と感じるのは特別支援学校という特徴があることを示している。また田実 (2008) は、学生たちは社会福祉施設での体験では、社会福祉施設への理解は進むものの教員としての資質向上という点は実感されにくく、その点は特別支援学校の方が実感されていることを示している。

伊藤 (2010) は、介護等体験からの学びの程度は教職に就く意思の程度とは相関はみられないが、多くの学生にとって心動かす体験であり、教職に就くか否かに関わらず、人間的な成長を促すものであることを指摘している。本論でも学生から同様の記述は多くみられているが、このことは、教師としての資質向上に直接結びつくものでないと否定的にとらえるよりもむしろ教師の前提となる、社会人としての土台

を作るという点で前向きに受け止めて良いのではないだろうか。

学生の記述には表れていないが、介護等体験にあたっては、体験先に迷惑をかけることが起きる場合もある。その多くは、日時やルールを守る、挨拶や報告・連絡・相談を行うといった社会人としての基本的なマナー、態度の不足に起因しているように思われる。教職課程履修において、介護等体験を教育実習の前段と位置づけ、学外での実習の心構えを養うという点から指導することも重要と考えている。

本論では、教師としての資質向上についての記述も見られているが、これには事前学習における施設・学校の教職員からの講義も大きく貢献していると思われる。講師たちはそれぞれの現場の立場から、教師となる学生たちに何を学んでほしいか、期待を込めて話す。学生たちは講師の専門性から多くを学び敬意を感じるとともに、自分たちの専門性についても考えるようになる。事後の振り返りでも教師として体験をどのように活かすかを考えさせているが、事前・事後学習の工夫によってさらに認識を確かなものにすることが可能と考えられ、この点は課題としていきたい。

さらに本論では、施設・学校の教職員の動きから学ぶという視点がみられている。最近の学校には「チームとしての学校」(文科省,2015)であることが求められており、多職種で組織されるチームとして機能する体制が強化されている。教師も専門性を磨きつつ、自他の役割を認識しチームの一員として多職種と協働できる力が求められている。体験では、高齢者・子どもたちとの関わりが優先されるであろうが、併せて教職員の動きを客観的に観察する視点を持つことも重要であり、これも事前事後学習に活かすべき課題と考える。

以上、学生の記述をもとに、介護等体験における学びについて整理してきた。ここでは、介護等体験特例法にうたわれる「人間の尊厳」、「社会連帯の理念」についての理解を含めて、コ

ミュニケーション能力の向上などその趣旨を踏まえた学びがなされており、さらにより広い視点で教師としてもしくは人間としての成長を促す契機になっていることがうかがえた。また学生の学びにおける事前事後学習の重要性も改めて確認するものであり、今回得られた学びの観点をすべての学生たちがより深めることができるよう、指導内容・方法を検討することが課題である。最後に、本研究における記述の整理はあくまで探索的に行ったものであるため、実証的に検討することも今後の課題である。

【文献】

- 現代教師養成研究会編 (2009) 教師をめざす人の介護等体験ハンドブック 三訂版 大修館書店
- 堀 (山口) 緑 (2012) 近畿大学における「介護等体験」への取り組み—2007年～2010年を中心に— 近畿大学教育論叢 23 (2), 1-14.
- 入江直子 (2008) 介護等体験の意義と課題—「神奈川大学方式」で取り組んでみて— 神奈川大学心理・教育研究論集 27, 93-101.
- 伊藤直樹 (2010) 教員養成における介護等体験の意味—2006～2008年度介護等体験アンケートの分析から— 明治大学教職課程年報 32, 41-51, 2010-03-31
- 柏崎秀子 (2014) 体験活動に向けた主体的な事前学習の開発とその効果—介護等体験の単位化— 実践女子大学文学部紀要 56, 31-41.
- 文部科学省 (2015) 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」(チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会 中間まとめ)
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/052/sonota/1360372.htm
- 田実潔 (2008) 介護等体験による学生の意識変化について 教職志望学生が介護等体験から学ぶもの—北星学園大学文学部北星論集 45 (2), 73-81.

田実潔 (2015) 11年間の縦断研究による介護等
 体験での学生意識変化—特に施設での体験か
 ら学生が学ぶもの— 北星学園大学社会福祉
 学部北星論集 52, 61-68.

表1 得られたカテゴリーと主な記述内容

カテゴリー	記述内容
高齢者・障がい者と接する体験	高齢者、認知症を持った人、障がいをもつ子どもと接し、関心を持つ 普段障がい者、身内以外の高齢者と接することがない やさしさ、思いやり、配慮の気持ちが芽生える 多様な個性や価値観があることを知る 高齢者の元気さ、明るさ 高齢者との会話からの学び（戦争体験など） ハンディを感じさせない子どもたちの元気さ、明るさ 成長力、生きる力に刺激を受ける マイナスの印象からプラスの印象へ 自分も老いていく存在であることの気づき 高齢者、障がい者と共に生きていくという姿勢
人との接し方	普通の生活にないコミュニケーションの難しさに直面 コミュニケーション能力、対応力に自信がついた コミュニケーションの楽しさ、うまく伝わったときの達成感
受容・共感的態度	傾聴の姿勢 相手の気持ち・立場に立って相手を理解しようとする姿勢 人を受容しようとする姿勢
非言語コミュニケーションの大切さ	一人ひとりの個性や状態に沿った接し方、話し方 相手に合わせた言葉選び、ジェスチャーなどの表現の大切さ
自分のコミュニケーションの取り方	表情、視線、行動などをよく観察することの大切さ 相手の反応を見たらうで会話、対応することの大切さ 積極的に自分から関わろうとする姿勢、自己開示の姿勢の大切さ 自分の表情が固いとうまくコミュニケーションが取れないことへの気づき 自分の善意もしくはは無意識の反応が相手を傷つけることへの気づき
スタッフ・教員からの学び	介護現場の大変さ、厳しさ 笑顔での対応 活動に前向きに取り組んでもらうための促し、声掛け 礼儀を持ったコミュニケーションや関係の取り方
対人援助職の意義	安全、健康面への配慮 命を預かるという責任の重さ
自立を支援・教育する	トラブル、ハプニングに臨機応変に対応する力 個人に対するきめ細やかな理解、それに基づいた支援 自立に向けた支援・教育について考える機会
場づくり	何でもやってあげるのではなくできないところを援助する 人を喜ばせること、楽しい雰囲気を作ることの大切さ 組織内での情報共有 個人だけでなく、グループ全体を見る視点
人間としての成長	感謝されること、感謝の気持ちを伝えることの大切さ 先入観(構え、偏見)にとらわれた自分を発見し、視野が広がる 教師としてというより人として体験するべき
教師としての資質向上	特別支援教育・福祉について教師として理解する 特別支援教育を担うことへの意識、心構え 地域(地域の施設、地域に住む人としての高齢者)の理解 高齢者、障がい者がおかれた社会の状況を知る 人とのつながり、支えあうことの大切さを伝えられる教師になる 教師として必要な人権尊重の精神、道徳観を身に着ける 偏見、差別のない社会づくりへの意識
体験の大切さ	現場を知ることによって得られる自信 座学でなく体験することの大切さ ～してあげるだけでなく、関わりから得られることへの気づき